

藍染めて 青春の書

丹羽文雄文学全集 第四卷
監染めて 青春の書



丹羽文雄文学全集 第四卷

藍染めて・青春の書

一九七五年四月八日 第一刷発行

著者 丹羽文雄

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二一二二（郵便番号 一一二二）
電話 東京（〇三）九四五一一二（大代表）・振替 東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社小島製本所

定価は箱に表示してあります

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします
©丹羽文雄 一九七五年 Printed in Japan

(文1)

目 次

若い季節	231
菜の花時まで	209
朗らかなある最初	179
青春の書	73
藍染めて	7

創作ノート

375

菜の花

359

故郷の山河

339

豹と薔薇

303

小鳩

285

装幀・辻村益朗
(写真・一九二四年夏、下宿にて)

丹羽文雄文学全集 第四卷

藍染めて・青春の書

藍

染

め

て

わが恋はあいそめてこそまさりけり
しかまのかちの色ならねども

一

二階は六畳ひと間、下は六畳に三畳の茶の間、それに台所、濡縁——塀をめぐらして、庭樹も五、六本あった。そういう家が二軒並んでいた。間の羽目板と壁をぶち抜いて、茶の間から隣の茶の間に通じていた。戸主は未亡人の赤池八千代で、二十二の娘栄子と小学校に通う二人の男子があった。娘はデパートに勤め、こちらの二階と隣家の三畳、六畳、二階の六畳をそれぞれ四人に貸していた。牛込横町の広い通りから路地を曲って、さらに溝板を渡り、奥まった静かな素人下宿であった。

家族のいる方の二階にはこの四月から第一高等学院に通う土岐門治がいた。彼には東京が初めてで、関西の田舎の中学を出、早稲田に入学出来た生活には容易に馴染みかねて、下宿の二階にひっこんでいる時間が多かった。田舎の大きな家に住み慣れて来た彼には、東京の素人下宿の生活振りが何か玩具遊びに似て、こちんまりとして可愛いと思

った。先輩の紹介でいきなり素人下宿にはいったのだが、一畳が月二円の約束も、気持にびったりしなかった。紙、石鹼、電球その他日用品をいっいち買いに出なければならぬ生活が珍しく、一つ家で二階と下の生活がはっきり区別されているのも奇妙な感じであった。一緒に早稲田大学にはいった友達は洋菓子店には一人で買いにはいれるのだが、他の店では一人で買物が出来ず、必要になると土岐を誘いに来た。学校の近くの下宿から十何町を歩いて来て、土岐をつれてそこらにふんだんにある化粧品店にはいり、石鹼を一つ買った。土岐には友達の小心がよく判った。友達は医者の子で、平常金を使うところは本屋と文房具店に限られていたその習慣が抜けないのだ。滑稽だが、本人にとっては当分勝手の違い恥しさであった。土岐も煎茶がはしくなり、近所の茶店に買いにいったが、何と買って買ってよいか判らず、一斤いくらと書いてあるので中位のを一斤買った。思ったより沢山にあった。罐もなく五分の一を使って湿らせてしまったが、四半斤という買い方を覚えたのは、それから半年も経ってからである。そんな土岐を階下の未亡人は時々呼んで、茶を入れ、菓子を出した。しかし進んで家族と打ちとけようとせず、向うから親しくなって来るのを土岐は待った。栄子は彼より年上なので、時に親しみにくく、十二、三の小学生とあそんでいる方が似合った。境遇の変化から彼は人嫌いになっ

ていた。同居人の五十年配の教師上りが茶の間に来ると、

彼はそれとなく二階へ上るのである。経歴も性格も判らぬ同居人と雑談することが気味悪くて、出来るだけ疎遠に振舞うのだったが、彼は二十歳の坊主頭なので、同居人達にとりたてて尖つた厭な意識は持たれないで済んだ。いつもさっぱりとした紺飛白を着て、色が白く、おっとりとした人柄や容貌は、田舎の旧家を思わせた。濃い藍色の三尺帯も気障でなく、土岐の人柄にふさわしく子供子供して似合

った。

神楽坂へたまに散歩に出ると、土岐のきまつて立ち寄る

本屋があった。喫茶店に一人ではいっていく勇氣は勿論なく、常設館も、絵看板を見てすぎるだけである。本屋には二十四、五の女店員がいて、彼がはいっていくと側に来た。さまざまな本が並べてある向う側の本を取ろうと半身を伸ばすと、女店員はすばやく手を伸ばして取ってくれた。商売上手だな、と感心して、土岐は三度に一度は金を払った。或る時、行くと、女店員が側に来た。手近の本を手にとって眺めていると、土岐の足が何かで持ちあげられる力を感じた。それが言葉のように間を置いたり、連続的に来た。彼は初め自分の足が板の外れを踏んでいるので、何かの拍子に地下の凹地に板がへこむのであらうと足を浮かせていたが、漸く判った。彼の踏んでいる板の一方を誰かが踏んでいて、誰かの足に力がある、と、土岐の足が下

から持ち上がるのである。女店員であった。

「……？」

向くと、女は待ちかまえていて頬笑んだ。ものを言いかけそうになった。土岐は何かの暗号に触れて、突然顔色が赭々々々として来るのを意識した。女は板を踏み返して貰いたいのであるのだらう、続けざまに板を踏んだ。土岐は怖くなった。両手は新刊本をひらいていたが、頭は添わず、女店員の生理的に崩れかけた顔立やからだつきをびくびく皮膚に感じていた。処女の固い皮膚でなく、処女を遠くに失った荒れ方で、頼れた、挑むような官能的なものが女店員にあった。そんな女を彼は田舎で見ているのである。知っている娘が結婚して二年経つと、処女時代の固さと匂いと豊潤さを失い、土岐の年齢から遠くに離れた肉感的な大人の世界にはいってしまった。しかも年は土岐より一つ若いのだった。女店員もさような大人の世界を露骨に持っていた。彼は怯えて本屋を出た。それきり神楽坂に出ても、本屋にははいらなかつた。女店員はその後少時店に現れていたが、臆て消えた。彼はこの瑣事を友達にも話さなかつた。大東京がそんな風に自分を試すのであらうと思った。その癖、彼の学級で一番初めに遅刻したのは彼であつた。遅刻のため、五十何人の同級生に土岐門治の名前を印象づけた。一度遅刻してしまうと、彼はしょつ中遅れた。ある時、英語会話の時間に遅れた。教師は若い英国人であ

った。相手が外人なのでいきなり扉を開けるわけにいかず、ノックした。が、いくらノックしても COME IN の応えもなく、教師の詩の朗読が聞えていた。我慢出来なくて、土岐は靴先で扉を蹴った。咄嗟に朗読はやんで、教壇から大股でこちらへやってくる登音を聞き、土岐は慌てて階段を降りた。そんな気短な乱暴なところも彼にはあった。

地方の女学校をやめた教師上りは一人で、隣りの六畳にいた。訪ねて来る中年の婦人があったが、どこかの教師のようであった。下宿人使用の後架がその男の部屋についているので、土岐は唐紙の外でちょっと言葉をかけた。部屋の中で急激に動く気配があった。唐紙を開けると、男は赤い顔して彼を睨みつけ、女教師は床の間の方を向いていた。

「君、君——」と土岐は廊下に出るところを呼びとめられた。「客のある時は部屋を通らないでくれ給え」

教師上りは表つきが別々な家に見えるので、麗々しく表札を掲げていたが、赤池八千代の苦情に会い、下宿人らしく名刺に貼しかえた。五十を越している彼は下宿生活を訪問客に対して気まり悪がったのだらう。

八千代の茶の間で、土岐はこの教師上りに次のようなことを訊かれた。

「君は大学なんかに通って、いったいどうするつもりなの

か。何になる考えでいるのかね？」

土岐はまともな返事をするのが何か馬鹿馬鹿しく、頭ごなしの言葉も不快であった。

「いいお嫁さんを貰うつもりですよ」

八千代と栄子は声に出して笑った。相手は思わず虚を衝かれたという顔になった。土岐は大人をこんな風に扱ったことが一度もないので、少時胸騒ぎしたが、相手はそれについて何とも言わなかった。

この同居人は東京で女学校を開こうと計画していた。資本金は一文もないのだが、学校を立てるといふ名目で寄付金を集めにかかっていた。

「金の儲かる商売は学校に限りますよ。名目もいいし、これ以上危険のない投機はないから、一つ当ててしまえば金庫ですよ。立派な不動産ですからね。生徒は卵を生んでくれる鶏ですよ」

聞いて、土岐は何か目が醒めるように感じた。社会のからくりに触れたと思ひ、この教師上りを輕蔑したが、初めからの印象が悪かったのが当たっていたのだと、このことは友達にも話した。

教師上りの隣の三畳に机を一つ置いて、金津尚子がいいた。栄子と同年配で、別に勤めているのでもなく、派手な着物を着て、毎日出歩いていた。

「近所の返田夏日さんのお弟子で、詩や小説を書いている

んですよ」

八千代は最初にそう言つて土岐に彼女の輪郭を教えた。

神戸の生れで、詩人返田に憧^{あこが}れて無断で家を飛び出して来たのであったが、働^{はたら}きもせず、食べているのは不思議であつた。時々机の上に林檎やバナナの皮がのつていた。瘦^やせて、腫^{はれ}が大きく、背が高く、美^び貌^{ぼう}であつた。尚子はよく返田夏日と神楽坂を散歩していたが、土岐が会おうと、彼女の顔は生き生きとして見えた。

「食べられなくなつた●で、尚子さん、果物で腹をすませているのよ」

栄子が陰口をきくのだったが、土岐には同年配の女の手持がよく判らないでいた。

「用心しないと駄目よ。土岐さんはおとなしいからきつと誘惑されちまうわ」と栄子は笑つた。

「そんなことありません、僕は大丈夫ですよ」

誘惑されることは一概にいやではなかつた。栄子は滋養分がまわりすぎたからだつきで、腫も丸く、口元が凹^{へこ}んで、小さい唇^{くちびる}をもつていた。しょつ中赤い頬をしていた。栄子のような生氣のあふれた顔立^{かおたち}もいいなど、土岐はこっそりと自分の趣味の多いのに苦笑していた。

二階の同居人とは、一度も顔を会わせなかつた。朝早く出て、夜が遅いので、茶の間の雑談にもはいらず、八千代達もこの人の噂^{うわさ}はあまりしなかつた。関心を持たれない、

かざり職人であつた。

尚子の机の上に小説本が載つていた。留守なので土岐はだまつて借りた。土岐は大学部に上れば政経にはいる予定だったが、小説を読むことは中学生から好きで、濫^{らん}読^{どく}の習慣はかなり激しかった。借りて来た本はスタンダールの翻訳であつたが、十分の鑑賞は出来ず、ただ筋を追う読み方であつた。

またの時、尚子の机の上に原稿紙がひろげてあつた。そばに書きそこないがくしゃくしゃに丸めて捨ててあるのを拾つて、土岐は自分の部屋で伸ばして読んだ。題は「草原」と書いてあつた。若い女と青年が神楽坂を歩いているところから始まつていたが、三分の二位で書き屑^{くず}にされていた。

尚子と話をしていると、土岐は自ずと一步譲つた控えめな言葉つきになつた。果物で腹をすませている氣の毒な生活も、あまり氣の毒と思わず、若い女がいつまでも一人ぐらしで何をしているのか判らないという辛辣^{しんせつ}な周囲の噂にも、彼は意地悪い感じは持たなかつた。尚子は時々土岐の部屋に遊びにきた。

「女子美術にあたしの可愛い妹がいるのよ。いつか紹介してあげるわね」

しかし真実の妹のつもりで、土岐は永い間思い違いをしていた。

「滋子っていうのよ、土岐さんとは恰度いい取組みよ。十八だから、二つ下ね。紹介してあげるのはいいけど、すぐ好きになっちゃ駄目よ。危いわね、きつと好きになりそうだから」

焦らされていると気が付かずに、土岐はそんな風に焦らされた。黒宮滋子といい、千葉生れであることも知った。

「とても長い睫毛をしているのよ。いつもルージュを押しつけたあとみたいな唇をしてるわ。首が細くて、まっ黒な髪をおとなしく束ねて……」美貌な尚子が好きになったというだけに、黒宮滋子の美貌には見当がついた。

噂を半分にしても黒宮滋子は綺麗な女性に違いなく、土岐は見ぬ人にあこがれた。

「早く紹介してほしいな」

この下宿にも一度来たことがあり、滋子の美しさは八千代も認めて褒めそやしていた。仕舞いには尚子の顔を見ると、土岐は自分の方から黒宮滋子のことを言い出した。

尚子の生活は相不変であつた。苦渋な顔をして、元氣のない時が多く、何かに悶えているのが土岐にも判るので、そんな時は滋子の方が訊ねられなかった。噂では、師の返田夏日と恋愛をして、返田の細君との三角関係で悩んでいるというのだった。頬はこけて、目が大きくなった。生活費は殆んど返田夏日が出していたのだが、もともと生活に余裕のない詩人なので、それが細君を躍起とさせた。尚

子は外出もせず、三疊の床にいたきりであつた。教師上りは自炊していた。隣りで土岐が家族達と賑やかな食事をしているような時、三疊の貸蒲団にくるまって恋愛と胃袋に苦しんでいる尚子に思いが至ると、喉をつまらせたが、立ち入るには自分は年が若いのだと、彼は遠くから氣の毒がった。

夕方下宿を出たきり、尚子が二日かえらなかつた。これまでも外泊は珍しくなかつたので、八千代も土岐も氣にかけずにいた。三日、四日と続いて、土岐はおやと思つた。八千代も漸く疑い出した。三疊を検べると、荷物は空のトランクが一つ、肌着の汚れものが戸棚の隅に押しこんであつた。十日目毎に仕払う貸蒲団は汗染みて尚子の佻しい生活を寒々と物語って、押入の板の上にじかに積み重ねてあつた。

「逃げ出したのじゃないか知ら」月六円の部屋代が二ヵ月とどこおっていたので、八千代はそのことで慌て出した。

詩人返田の家へ八千代は様子を訊きに行つたが、ここの暫く尚子は顔を見せぬが、どうしてるかと反対に訊かれた。栄子は平生の反感も手伝い、悪口を言い、母親も部屋代ののりから娘と言葉を合わせた。土岐はがっかりした。尚子のやり方には一応他人らしく眉をひそめるのだったが、黒宮滋子と逢える手段を失つたことが、残念であつた。綻びかけた花がしぼんでしまったほどの氣落ちで、しか

し、それは別にして土岐の日課は変らなかつた。この頃では教室でも二人の友達が出来た。河瀬潔は新潟の、佐島睦雄は栃木の出身であつた。何かの時間に欠席をすると、二人の内どちらかが出席の返事をしてくれた。勉強をする熱度が親しくなつたのではなかつた。怠けものとしてどちらがより徹底しているか、それを較べることで互に近しくなつた。それにしても、田舎の中学生の殻をいまだにつけている規模の小さい怠け方であつた。しかし河瀬が国富論の噂をすると、土岐はこゝそりと改造文庫のアダム・スミスにとり付いて、何の地下もなくいきなり理解しようとした。理解出来なく、氣押されてならないのだったが、土岐は口に出すことを取じた。しかし系統立つた読書癖が次第に出来たのは、河瀬のおかげであつた。佐島は詩人で、本科にはいれば仏文科に変わると言つていた。

朝の登校で下宿の三利土で靴をはいてみると、郵便がほり込まれた。葉書で、金津尚子宛のがあり、黒宮滋子の筆跡であつた。咄嗟に土岐は自分に來た葉書のようにかくしに入れた。山吹町を通り、鶴巻町を歩き乍ら讀んだ。少時音信がないが、どうしているかと簡単に訊いて來た手紙であつた。土岐は尚子の失踪を報告する義務を感じて、八千代にこの葉書を見せなかつたことを悪いとは思わなかつた。赤池一家では尚子は悪者にされている、悪者のところへ來た手紙がどんな扱いをされるか——それに抵抗して手

紙を横取したことは、尚子にも滋子にも喜ばれてよいという氣が強くした。

女子美術宛に返事を書いた。簡単に尚子の失踪を報告して、併せて、若し尚子がいたら自分は紹介して貰える筈だつたとつけ加えた。それだけで十分交際したがっている心持は通じさせたつもりであつた。

返事は封書で來た。差出人の名前はなかつたが、達筆なので、すぐに滋子と知れた。先ず礼を述べ、これまで異性と手紙の上でも交際をしたことがない故、怖しいと拒んで來た。土岐の心は挫かれた。それ切り手紙はやめた。

一週間が経つと、黒宮滋子から手紙が來た。諦めていた土岐は、女の氣持にくらべて簡単に氣持を片付けていた自分の方が遙かにデリカシーに欠けていたように思った。

——尚子が紹介すると言ひ残しておいたのなら、手紙の上の交際位はしてもよい、そういう意味だつた。じかに紹介はされなかつたけれど、尚子の言葉がある以上は間接の紹介であろうと、滋子の氣持が動き出してくれたことが、土岐には嬉しかった。

手紙の交際が始まつた。滋子は金津尚子の優しい姉ぶりを書いて來た。その内に自己紹介をし合つた。土岐も正直に履歴を書いた。

一度逢いたいと土岐は書いた。彼女は斷つて來た。するとその後の手紙は逢つてくれるか、逢わないのかと言う一